



# 大清水中だより

教育理念 自由と責任  
教育目標 『感謝 努力 創造力』

2022年3月25日発行 年度最終号 <http://www1.fujisawa-kng.ed.jp/johsh/> TEL 0466-50-8353

藤沢市立大清水中学校

〒251-0002

藤沢市大鋸 1400

校長 百武 三郎

つい先日まで上手に鳴けなかったウグイスが、澄んだ声で「ホ～ホケキョッ！」と高らかに鳴くことができるようになりました。学びの場のウグイスらしく上手に覚え、穏やかな空気の中で皆に春を告げています。ヒバリの声も聞かれ、日差しの温かさも一層感じます。いよいよ2021年度も今日限りとなりました。通りを歩くと沈丁花の香りがどこからともなく漂ってきます。中国南部が原産と言われる沈丁花は、別名を七里香（しちりこう）というそうです。花を見ることはなくても、七里先までもその香りが漂ってくる、ということらしいです。同じ意味合いから九里香と呼ばれる花もあり、私は見たことも嗅いだこともないのですが、百里香（伊吹麝香草）や千里香（白い花をつける桜の一種）と呼ばれる植物もあるようです。いったいどのような香りなのか、どれほど香るのか気になります。新年度までは、あと2週間ほどとなりました。春の音や香りに気持ちが高鳴りますが、心を整えて新年度に向かいたい今日この頃です。

## 第37回卒業証書授与式 ～101名の卒業生たち～

2022年3月9日（水）穏やかな晴天の中、本校の37回目の卒業証書授与式を挙げる事ができました。昨年は式場で生徒一人ひとりに卒業証書を手渡す事ができませんでしたが、今年は101名の卒業生全員に証書を手渡す事ができました。来賓の参加もなく、在校生は生徒会の本部役員のみ参加。保護者は家庭1名という制限がかかる中でしたが、101名の卒業生たちが立派に巣立っていきました。

37回目の卒業式をもって大清水中学校の卒業生は総数5400名を超えました。歴史の長い学校や規模の大きな学校とは比較にならない、市内で一番小さな中学校ですが、大清水中学校には5400名以上の仲間がいる、ともいえるのです。最初の卒業生は50歳を超えています。幅広い年齢の卒業生に新たに101名のなかまが加わったのです。



式後の門出の際には、たくさんの明るい笑顔が昇降口前に溢れました。マスクさえしていなければ、暖かな春の日の幸せいっぱいの素敵なシーンです。心の片隅にはコロナの不安を持ちつつも、笑顔があふれた卒業証書授与式でした。新たな進路で悩むこともあるでしょう。でも「ピンチはチャンス！」です。これからも大清水中学校は卒業生の皆さんを応援しています！何か心配なことがあればいつでも中学校を訪ねてください。



## 千羽鶴、市民病院へはばたく

生徒会本部の呼びかけで集まった千羽の折り鶴。3月3日に藤沢市民病院に届ける事ができました。病院からは院長、看護部長、事務局長が出迎えてくださりました。生徒会を代表して届けに行った副会長から病院長に折り鶴を手渡す事ができました。

市民病院では、大清水の会の皆さんが取り組んでくださった「屋上イルミネーション」や「俵せの黄色いハンカチ」についても、関係者に説明する事ができました。生徒一人ひとりの想いと取り組みだけでなく、保護者の皆さんの協力や地域の皆さんの理解があって、このプロジェクトを進める事ができました。私たち大清水中学校は、これからも藤沢市民病院を応援し続けます。そして、これらの活動を通じて、生徒の心に感謝と思いやりの気持ちが広がっていくことを目指していきます。

3月4日の読売新聞にもタウンニュース（カラー写真入り）にも記事として紹介されています。また、西部地区社会福祉協議会の「西部地区福祉だより」でも取り上げて下さいました。「西部地区福祉だより」は各戸配付されるそうです。

また、藤沢市の公式フェイスブック「カラフルフジサワ」にも紹介されていますのでご覧ください。

## 歌おう、高らかに！ ～合唱コンクール～

当初の予定を変更して、変則的ですが学年ごとに発表する形式で合唱コンクールに取り組みました。3月7日には3年生の合唱コンクールを行いました。今回は練習時間がとても少ない中でしたが、さすがは3年生でした。1、2年生に3年生らしい響き豊かな合唱を聞かせてくれました。

また、1、2年生は3月18日に体育館でコンクールを行いました。3年生同様少ない練習時間の中、また厳しい感染症対策の中でしたが、来年度へとつながる素敵な歌声を響かせてくれました。透き通った女声が印象的だったクラス、男声の豊かな響きが印象的だったクラス。それぞれのクラスの持ち味を生かした素晴らしい歌声でした。審査員を務めました、審査員を悩ませる歌声に感動しました。

## 教育は恩送り ～教員人生を振り返る～

昭和60年に神奈川県教員として採用され中学校の教壇へと立ちました。新卒の教員ですから、しくじること数知れず。そのたびに生徒にも保護者にも同僚にも迷惑をかけました。叱っていただいたことも幾度もあります。その一方で、しくじった時には同僚だけでなく生徒にも保護者にも地域の方々にも助けてもらいました。温かく育ててもらったのだと思います。

採用試験に合格し、辞令を受け取れば形の上では教員（先生）ですが、そこは入口にしかすぎず本当の教師への道はそこから始まります。振り返れば37年の教員人生の中でどれほどの恩を受けてきたことでしょうか。職場での先輩教員からの指導だけでなく、保護者にも地域の方にも、そして何より生徒に育ててもらいながら、教員の道を歩んできました。子ども達を育てるのが教員の仕事ですが、実は子ども達に育ててもらっていたと感じます。また、家庭を犠牲とまでは言いませんが、家族に様々な場面で負担をかけてきたことは事実です。時期や状況によっては、仕事に区切りをつけて帰宅するのが午前0時を回っていたことも何度となくありました。毎日帰宅しているのに、我が子と会話するのが一週間ぶりということも珍しくありませんでした。家族の支えがあってここまでやってこれたと感謝しています。

何かをしてもらったときに「恩返しをする」ことを私たちは考えます。しかし、教育は恩返しではなく、恩送りの世界だと思うのです。受けた恩を直接返す「恩返し」はできませんが、育ててもらい力をつけさせてもらったおかげで今があり、それを何らかの形でたとえわずかであっても次の世代に恩を送ること（恩送り）で教育は動き、それによって学校は子ども達を育てていると思うのです。これは学校に限ったことではありません。これまでの多くの出会いと受けた恩に感謝をしつつ、退職しても何らかの形で自分の培った教育財産を後進に引き継いでいきたいと思っています。



大清水中学校ではわずか2年の勤務でした。新型コロナウイルス感染症で学校が閉鎖されている最中に着任し、6月までは生徒の顔を見ることもなく過ごしました。

生徒、保護者も辛かったと思いますが、生徒のいない学校ほど張り合いのない場所はありませんでした。それまでは、たとえ夏休みでも生徒の音が響いていた学校に、子ども達の声がないのです。初めての経験と同時に、二度と繰り返したくない経験でした。しかし、ここにも学びがあったことは事実です。これまでの経験を土台にしながらも、試行錯誤をしながらここまでやってきました。その陰に保護者の皆さんや地域の皆さんの支えがあったことは、間違いありませんでした。本当に感謝しています。

校長として取り組みたいことがいくつもありましたが、コロナ禍ではかなわぬものも多く、残念でなりません。しかし、コロナ禍で多くの制限がかかるなかでしたが、それでも子ども達に“何もできなかったのが思い出”とは思ってほしくなかったので、各種行事も色々と工夫をして実施しました。校長としての想いというよりも全職員の“大清水中学校の教職員としての想い”がそこにあったと思います。

教職員生活 37年の最後を大清水中学校で迎えたのも何かの縁でしょう。縁のできた大清水中学校の保護者の皆様、地域の皆様に、最後にお願ひがあります。子ども達はもちろん、大清水の地域が育てた教職員が藤沢市内の各地へと巣立ち活躍できるように、大清水中学校の子ども達を、教職員を今後もどうぞ育ててください。去るものから最後のお願ひです。どうか子ども達を頼みます。教職員を頼みます。愛すべき大清水中学校の未来を頼みます。

